

藤原てい『赤い丘 赤い河 -十字架を背負って-』論  
-開拓団引揚げの語りによる引揚げ文学への一視角-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 蘇, 昊明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22026">http://hdl.handle.net/10291/22026</a>

# 藤原てい 『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』論

——開拓団引揚げの語りによる引揚げ文学への一視角

A Study on “Red Hill Red River: Cross on Back” written by FUJIWARA TEI

——From the perspective of the migration narrative records by the pioneer group on Repatriation Literature——

博士後期課程 日本文学専攻 二〇二一年度入学

蘇 昊 明

SU Haoming

## 【論文要旨】

引揚げ体験記が多いなか、開拓団の引揚げを扱った作品は少ない。引揚げ体験記『流れる星は生きている』でベストセラー作家となった藤原ていによる『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』（修道社、一九七二年）は大青森郷開拓団の引揚げを扱った重要な試みである。これまでの引揚げ文学研究は引揚げ体験を持った作家たちの作品におけるポストコロナル問題を中心に考察するものが多く、引揚げ体験記を対象とした研究、特に開拓団の引揚げ体験記を対象とした研究はまだ少ない。本稿では、大青森郷開拓団の引揚げを扱った記録を分析する上で、開拓団の「満州」における位置付け、および引揚げにおける様々な人物像を考察する。これによって引揚げ文学の全体像に迫りたい。

【キーワード】 藤原てい 開拓団 引揚げ ジェンダー 他者

## おわりに

藤原ていは一九四九年、自身の引揚げ体験を素材に書いた『流れる星は生きている』を出版し、一気にベストセラー作家となった。『流れる星は生きている』は引揚げを語る作品として長い時期に渡り、広く読まれた。しかし、同じく藤原ていによる開拓団の引揚げを扱った『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』（修道社、一九七二年）は注目されることなく、忘れられていった。『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は大青森郷開拓団の引揚げを記述した実録小説で、一九五四年、「呼べどこたえず」という題名で、改訂縮刷決定版の『大東亜戦史』（富士書

苑、一九五四年六月）に収録されている。現在このテキストは、国立国会図書館のデジタル版で閲覧することができる。一九七二年、修道社より、単行本化されることになった。題名が違うが、内容の変化は見られない。本稿は、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』をテキストに論を進めていくことにする。『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』のあとがきにおいて、藤原ていは早く「満州」へ行く前に、開拓団に決心を寄せていたこと、引揚げ後、昭和二十五、六年に開拓団が「ほとんど全滅した」との話を聞き、すぐ、生存者が引揚げてきた青森県へ取材に赴いたことを述べた。また、開拓団に目を向けるきっかけは上野駅から、鳴り物入りで送出される兵隊と、無言に送出される開拓団の全く違う光景だと藤原ていが追想している。藤原ていが農村、農民に関心を持ったのは、彼女自身は農村出身であることに負うところが多い。後年のエッセイ集の中からも、彼女の農村への愛着と関心が読み取れる。したがって、同じ「満州」からの引揚げ体験をした開拓団に関心を寄せるのは非常に自然である。ところが、「呼べどこたえず」も、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』も、大きな反響を呼ぶことができず、見逃されてきた。

日本の敗戦に伴い、「満州」在住の日本人は引揚げを余儀なくさせられた。塚瀬進の『満州の日本人』によると、敗戦当時、「満州」で暮らしていた日本人は一五〇万人がいた<sup>②</sup>。また、蘭信三によると、一九三二年から一九四五年の十四年間に、日本帝国から「満州」に約二七万の農業移民を送出した<sup>③</sup>。つまり、当時では農業移民は「満州」における日本人の二〇%弱を占めている。しかし、引揚げにおいて、二七万人の農業

移民の中で、八万人近くが犠牲となり、満州での敗戦に伴う日本人死者総数の四五%を占めた<sup>④</sup>。在満日本人の二〇%弱を占めた開拓団が引揚げにおける死亡人口の半数近くを占めたことは開拓団の引揚げの悲惨さを語っている。開拓団の高い死亡率は戦後日本社会における引揚げによる被害者意識形成の一要因にも考えられる。したがって、開拓団は「満州」においてどのように位置付けられたか、開拓団はいかなる引揚げを体験したかは非常に重要な課題となる。

ところが、引揚げ直後、再入植などの実情もあり、「満州」からの引揚げの大多数を占める開拓民（＝「避難民」―「逃避行者」）自身による体験記は一九五〇年前後には存在せず、第三者の記述によっており、そのなかに開拓民も姿が記されるにとどまった<sup>⑤</sup>。「筆を執りえない（執りえなかった）階層の人々の経験の記述は、後年に持ち越されることとなる」と成田龍一は『戦争経験』の戦後史――語られた体験／証言／記憶』において、開拓団の引揚げを扱った文学作品が少ない現状と原因を論述した。また、朴裕河による『引揚げ文学論序論』（人文書院、二〇一六年）を代表とした引揚げ文学についての研究は、主に引揚げ体験を持った作家たちの作品におけるポストコロニアル問題を中心に考察するので、引揚げ体験記を対象とした研究はまだ少ない。特に、前述した原因で、開拓団の引揚げを扱った作品が少ない現実もあり、それを対象とした研究はほとんど見当たらない。したがって、開拓団を取り扱う引揚げ体験記、実録小説などを分析することによって、開拓団員の引揚げを解説することは、引揚げ文学研究の空白を埋める作業であり、引揚げ全体像に迫る過程でもありと思われる。そこで、開拓団の引揚げを扱った

作品が少ないなか、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は開拓団の引揚げを考察するには大事な作品と思われる。

『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』が扱った大青森開拓団は「一九四四年十月、青森開拓団と五戸郷開拓団および尾上開拓団により、合併した開拓団<sup>⑥</sup>」であり、「満州」の北のほうの「ソ満」国境近くに入植した開拓団である。大青森郷開拓団は、一九四五年八月十三日より、黒河省遼克県双河鎮から出発し、翌年の一九四六年六月十五日日本に上陸した。出発時、合計四七〇人の団員は、長春に到着した時点では、一七六人になり、その後、博多に上陸するまでに、さらに死者が多数出た。『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』が扱ったのは、大青森郷開拓団が経験した双河鎮から長春までの引揚げであるが、引揚げにおける開拓団と関東軍との力学、開拓団内部のジェンダー問題、「満州」における複雑な人間様相などを克明に描いた。

本稿では、大青森郷開拓団の引揚げを扱った記録を分析する上で、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』を読み込み、開拓団の「満州」における位置付け、および引揚げにおける様々な人物像を考察する。これによって引揚げ文学の全体像に迫りたい。

## 一、大青森開拓団の引揚げに対する記述の推移

大青森郷の引揚げを記述したものは、筆者が調べたところ、四つあり、時系列に並べてみると、次の通りである。

(1) 川浪元「大青森郷開拓団遭難記」(『雄鶏通信』一九四九年五月)

(2) 麻田直樹「開拓団死の行進」(『大東亜戦史』満洲篇上、富士書苑、一九五三年五月)

(3) 藤原てい「呼べどこたえず」(『大東亜戦史』満洲篇、改訂縮刷決定版、富士書苑、一九五四年六月)

(4) 川崎文三郎『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』(五戸郷開拓遭難会、一九六三年八月)

(1) 川浪元「大青森郷開拓団遭難記」

一九四九年五月、『雄鶏通信』に載せられた川浪元による「大青森郷開拓団遭難記」は、一番早く大青森郷開拓団の引揚げを記述したと思われる。『雄鶏通信』という雑誌はすでに廃刊となっているが、出版されたものはマイクロ化され、国立国会図書館で閲覧できる。「遭難記」と題して、テーマはいうまでもなく被害である。記録は逃避行が始まる直前から書き出して、開拓団の置かれていた当時の状況をも詳しく記している。それから、逃避行が始まってからのことを順次に描いている。三洲義勇開拓団に避難していったところ、三洲義勇開拓団はすでに引揚げたこと、途中オロチョン族に出会い、ソ連軍の情報を得て、密林に入り込んだこと、密林を脱出するために、婦女子、老人九十名を密林に置き去りにしたこと、密林を脱出する途中団員が次々となくなったこと、六河林で「満人」に助けられたこと、諾敏開拓団に合流したこと、「匪賊」に襲撃されること、綏稜の収容所でソ連兵が略奪に来ること、団員が生きたために子供を売ること、助産婦の江渡美代の死を記述した。記録は開拓団が経験したことを俯瞰的に記述している。個人の出来事は

くつかあるが、いずれも代表的な悲惨事として書かれている。終わりのところに、団の生き残った人数と死亡者数を示し、その逃避行はいかに残酷なものかを立証している。

## (2) 麻田直樹「開拓団死の行進」

「大青森郷開拓団遭難記」に続き、麻田直樹による「開拓団死の行進」は『大東亜戦史』満洲篇上に収録され、一九五三年五月、富士書苑より刊行された。「開拓団死の行進」は東京開拓団、哈達河開拓団、大青森開拓団の三つの開拓団の逃避行を詳しく記述したほか、第八次大泉子開拓団を始め、十一の開拓団の悲惨な始末をも記録した。「死の行進」というのはもともと囚人や捕虜の健康や生命を顧みない強制的な移動のことを指すが、最初に使われていたのは一九四四年から四五年の冬にナチスドイツによって行われた囚人の強制移動に対して後年歴史家が名付けたものである。アジア地域では日本軍による「バターン死の行進」が知られる。その特徴として過酷な条件と高い死亡率が挙げられる。「開拓団死の行進」と命名したのもやはり開拓団の引揚げは過酷な状況のもとで行われ、多くの犠牲者を出したことを強調しようという意図が働いていると思われる。『大東亜戦史』は「満洲、朝鮮、中国、インドシナ、タイ、ビルマ、インドネシア、マレイ、太平洋諸島、フィリッピン等、東亜の各地に派遣されていた有力な新聞通信の記者諸君百数十氏によって執筆された」ものである。「満洲」からの引揚げを記述したものは満洲篇上・下に収録されているが、その記録のほとんどは居留民の視線で記されている。開拓団の逃避行について記述したのは「開拓団死の行進」しかない。開拓団という特殊な集団はあまり注目されていないこと

が窺える。なお、『大東亜戦史』満洲篇下に、藤原ていの「三つの国境線」が収録されている。「三つの国境線」は題名が変わったが、内容は『流れる星は生きている』とほぼ同じで、藤原ていの引揚げを扱ったものである。

大青森郷開拓団の逃避行を記述した部分は「愛児を売って食いつなく——黒河大青森開拓団の難行」というタイトルである。内容は「大青森郷開拓団遭難記」とほぼ同じである。「愛児を売って食いつなく」というのは、やはり開拓団の逃避行が置かれていた状況の厳しさを物語っている。この記録の中では、作者の視線は主に開拓団内部に注がれ、外界との交渉はほとんど書かれていない。空腹のなか「六河林」に着いてようやく満腹できたことを書いたが、「大青森郷開拓団遭難記」が明記した「満人」による援助だということは省略された。他の東京開拓団と哈達河開拓団の逃避行に対する記述を見れば、記述全体は関東軍への糾弾、「匪襲」による被害、逃避行の悲惨事がテーマであり、対外的な視線が遮断されている。

## (3) 藤原てい「呼べどこたえず」

「呼べどこたえず」は、記録をもとにした小説である。改訂縮刷決定版の『大東亜戦史』満洲篇上に収録されている。現在国立国会図書館のデジタル版で閲覧することができる。「呼べどこたえず」の注によれば、小説を書く資料は川崎文三郎からもらったのである。川崎文三郎は青森郷開拓団の総団長を務めていた人で、後、『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』という題名で、大青森郷開拓団に属する五戸郷開拓団の引揚げを書き記している。藤原ていは、一九五〇年、あるいは五一年頃、青

森で川崎文三郎に取材した大青森郷開拓団の引揚げ体験を「呼べどこたえず」に書いたのである。改訂縮刷決定版の『大東亜戦史』満洲篇に(2)で紹介した「開拓団死の行進」も再収録されているが、中では、大青森郷開拓団についての記述は削除された。「呼べどこたえず」のすく後に配列されているので、同じ大青森郷開拓団についての記述の重複を避けたいと思われる。ちなみに、藤原ていの夫、新田次郎による「豆満江」という彼自身の引揚げ体験、延吉での体験を作品化したものも同じ「満州篇」に収録されている。

作品が描いた出来事は前述した二篇とほとんど一緒である。大青森開拓団の逃避行の全貌は大きな枠組みとして定着していると言える。「呼べどこたえず」はこの大きな枠のもとで、視点を団体から個人に移し、特定の開拓団男女の個人の体験への記述によって、大青森開拓団の逃避行を描き出している。個人体験の記述は機械的な枠組みに血肉を盛り込むような加工である。作品の前半は加代という子持ちの女性の視点を通して逃避行における女性の困難などを描き、後半は木村忠三という団長代理役の視点で引揚げの出来事を描くことで、逃避行における人間の心理的葛藤を描出している。この作品も前の大青森開拓団の引揚げへの記述と一貫して被害を語るものである。ところが、作品の中で「満人」との接触が描かれ、「満人」のイメージはより明白なものになっている。さらに開拓団女性のセクシュアリティ的被害なども描かれ、逃避行の現実味を高めた。

(4) 川崎文三郎『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』  
川崎文三郎による『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』は、五戸郷開

拓遺族会より一九六三年に発行されたが、非売品としての発行なので、広く読まれたと思えない。二〇一三年、塚原常次の編集によって、『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉・満州開拓女教師の記録死線をこえて』として出版されることになった。『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉・満州開拓女教師の記録死線をこえて』は、「川崎文三郎による花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉」「北満農民救済記録」「大青森郷開拓団避難状況報告並搜索救出願」、及び田中コノによる「満州開拓女教師の記録死線をこえて」を収録した上、塚原常次によるあとがきがあり、「満州国」及び引揚げについて詳しく紹介している。

川崎文三郎は五戸郷開拓団団長であると同時に、大青森郷開拓団の総団長でもある。敗戦当時は応召して、開拓団にいなかった。川崎文三郎の妻と二人の子供は開拓団と一緒に行動していたが、密林に置き去りにされ、なくなった。合田一道の『満蒙開拓団の終焉 検証・満州一九四五年夏』によると、川崎文三郎は引揚げ後複数の開拓団員から状況を聞いて引揚げの出来事をノートにまとめ、後に『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』に書いた<sup>9)</sup>。

『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』は川浪元の「大青森郷開拓団遭難記」をベースに書いたものである。両作の大部分はほとんど一緒で、川浪元と川崎文三郎は同一人物ではないかと思われるが、それを証明するものはまだない。前述した通り、大青森開拓団は、五戸郷開拓団と青森開拓団、尾上開拓団からなっていた。したがって、五戸郷開拓団は、他の二つの開拓団と一緒に、大青森開拓団として、一緒に行動していた。作品の中では「迎えを待つ」という新設した節があり、置き去り

にされた人々の状況、心情を探ろうとした。また作品の最後に「ついに還らず」という新しい節のなかで、生き残った人々が途中で亡くなった人を偲ぶ言葉が綴られている。一方、川崎文三郎が五戸郷開拓団の団員を探すために再び北上し、結局無駄に終わってしまうことになったことも記述されている。

『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』は同じく被害をテーマとしている。特徴として、『花なき墓標——五戸郷開拓団の終焉』は、白樺小屋に置き去りにされた人々の視野を取り入れ、どのような状況に残され、またどういった心情で死を迎えたのかを推し量り、体得しようと試みた。その一方、身内を捨てた団員の無念も綴られた。

本稿で取り上げる『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は、題名が違うが、内容は「呼べどこたえず」と一緒に、一九七二年、修道社より、単行本化された。改題の『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は、「赤い」という色は戦時中、形成された「赤い夕日の満州」という多くの日本人の「満州」観<sup>⑩</sup>を連想させると同時に、血に染められた丘、河というイメージをも作り上げている。一方、十字架はキリスト教の代表的なシンボルであり、受難を象徴するものである。したがって、この作品は前述した大青森郷開拓団の引揚げに関する記述と同様に被害を語るものである。

一九七二年という時点で単行本化されたということは、その時期的な意味も考えなければならぬ。修道社編集部による「本書の背景について」によれば、「満州」の開拓団の悲惨な結末は、この本を出版する動

機の一つであり、また、同年、グアム島から帰還した横井庄一は国民的関心を集め、横井と違った形の苦痛を体験した満蒙開拓団、「関東軍の棄民的な行為によって生じたこの民族的悲劇」について見つける必要があると思われる。その一方、日本社会において、ベトナム戦争をきっかけに、十五年戦争や植民地支配について、加害責任の自覚が見られるようになった。また、一九七一年より、アメリカ大統領のニクソンの訪中宣言などの動向により、ショックを受けた日本は、日中関係を新しく考えざるを得なくなったので、その影響は、「引揚げ」「抑留」などへの記述にも及んだ<sup>⑪</sup>。そのような背景のもとで、作者の藤原ていも、戦争や植民地支配への反省を考えるようになったと思われる。『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』が出版された一年前に、藤原ていはエッセイ集『生きがい論』において、「今まで、考えていた被害者意識が音をたててくずれていった」、「為政者に同調して、中国大陸へ、または、南方の国々へと軍を進めるのが、むしろ国威の高揚でもあるかのように錯覚していた自分は、いわば戦争の共犯者なのかも知れなかった」と、被害者意識の崩壊、加害者意識の芽生えを示した。したがって、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』の単行本化は満蒙開拓団への問い直しであり、また、他者との関係性へのアクセスであると思われる。

『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は「ソ連国境の黒い土」「湿地帯の死の沼」「密林の彷徨」「白樺小屋の阿修羅」「匪賊来襲の日々」「悪鬼と善鬼」「新なる略奪者」「かすかな光を」といった八つの部分からなっている。前の四部分は女性である加代の視点によって展開し、後

半の三部分は木村忠三の視点によって展開する。以下、大青森郷開拓団は、「満州」においてどのように位置付けられたかを分析する上で、引揚げにおける人間諸相を考察する。

## 二、開拓団と関東軍、日本との関係性

作品の第一部分では、加代の追憶によって、「満州」へ入植する時期が四年前の一九四一年であることがわかる。前述したように、大青森郷開拓団は青森開拓団と五戸郷開拓団及び尾上開拓団により、合併した開拓団である。実際、青森開拓団は一九四〇年、五戸郷開拓団は一九四一年、尾上開拓団は一九四三年に「満州」の黒河省遜克県に入植した<sup>12</sup>。しかし、作中において、なぜ「満州」に来たのか、「満州」への移民はいかに実現したのかについて全く触れていない。加代のいる五戸郷開拓団の入植時間は蘭信三の『満州移民』の歴史社会学』（行路社、一九九四年）によれば、「満州」移民事業の第二期にあたる。第二期の「満州」移民事業は、「二十ヶ年百万戸送出計画」が発表されるに伴い、国策化され、さらに「分村移民計画」と農村経済更生運動の結びつきによって政府政策の中心に位置づけられた<sup>14</sup>。第二期において、「満州開拓政策基本要綱」が打ち出され、「満州」を「東亜新秩序建設」の拠点とし、「満州」移民事業を「日満両国の一体的重要国策」と位置付けた<sup>15</sup>。

加代がいる双河鎮は青森に似た風土で、加代たちにとって「骨を埋める場所まで作っておいた」場所である。加代の話によれば、その地での開拓団の任務は、「立派に軍への供出も果た」すことであり、同時に、任務を果たす代わりに、「日本がある。私達の背後にはあの強い関東軍

が守っていてくれる」のである。このような開拓団と日本、関東軍との関係性は、開拓団員にとって、一般的な認識である。開拓団の背後に日本があり、「満州」へ移民してきたにもかかわらず、開拓団員はあくまでも日本人である。実際、日本が敗戦するまで、「満州国」において、国籍法が制定されることはなかった。「国籍法制定を阻んだ最大の原因、それは民族協和、王道国家の理想国家と満洲国を称しながら、日本国籍を離れて満洲国籍に移ることを峻拒し続けた在満日本人の心であった<sup>16</sup>」と山室信一が述べているように、日本と切り離して、「満州」国籍へ移ることを「在満」日本人が心理的に拒んでいるのである。その裏には、「在満」日本人の日本との強い連帯感がある。また、「満州」現地の実権を握っている関東軍との間では、開拓団が軍への供出を果たすことによって、関東軍が守ってくれるという双方向的な関係にあると、開拓団員は考えているのである。

ところが、作品の背景になっている事実関係をみると、事情は違っていた。その事実関係について、以下まとめたい。国策移民の成立過程を遡ってみれば、開拓団と関東軍とは必ずしもそういう支え合う関係ではないことがわかる。喜多一雄『満洲開拓論』（明文堂、一九九四年）によれば、満州への移民事業は関東軍と内地の加藤完治グループによって推し進められてきた。関東軍内部でまず満州移民案を提出した人物は東宮鉄男である。なお、筆者は、二〇二二年三月二四日、加藤完治が設立に関与した満蒙開拓青少年義勇軍訓練所の跡地にある水戸市内原郷土史義勇軍資料館を訪問し、満州開拓の青少年義勇軍の詳細を知ることができた。



一九三二年、東宮鉄男は石原莞爾に二通の意見具申書を提出した。意見具申書は関東軍を説得して、在郷軍人を召集し、移民として「満州」へ入れようとするものである。移民の目的は日本軍に代わってその任務を続行することである。日本軍の任務というのはいわゆる「匪賊」の掃討及びソ連への防衛である。二通目の具申書では詳しく実行案を立てた。

それとほぼ同時期に日本内地では加藤完治グループも「満州」農業移民を遂行させるために動き始めた。当時の日本内地の状況として、経済恐慌によって農村経済が打撃を受け、過剰人口問題が生じたのである。「土地饑餓と経済恐慌」とに懊悩せる日本農民のために、新たななる壤土を興へ、経済的生産の機会を作せんとし、其極、大量の邦人農業移民の送出計画<sup>⑦</sup>を加藤完治グループが練り上げた。加藤グループが農業移民を提案したのはあくまでも「土地饑餓と経済恐慌」とに懊悩せる日本農民のためであった。

しかし、関東軍の「満州」移民に対する需要は、加藤グループの「満州」への移民送出の需要は結果的にびつたりと一致することになった。一九三二年、「満州」移民事業は転機を迎え、加藤完治と東宮鉄男が連携して「満州」移民事業を進めるようになった。しかし、加藤グループの「満州」移民案と東宮鉄男の「満州」移民は内実において大きなズレを含むことは見逃せない。同じ「満州」への移民を推進するが、東宮鉄男が代表する関東軍側が狙ったのは移民を以て、治安を維持し、対ソ防衛をはたすことである。一方、加藤グループの重心は日本内地における農村問題の解決にあるのである。

そのような齟齬は、ソ連が進攻してくるとともに、露呈してくる。ソ連参戦した後、大青森郷開拓団は日ソ開戦の知らせだけを受け、その後の対処などについて、関東軍からの指示も、対策も何もなかった。作品にも描かれていたように、双河鎮にいる日系居留民は、すでに何処かへ避難したが、国境近くに配置された大青森開拓団は、関東軍に切り捨てられたのである。加藤聖文は『満蒙開拓団 虚妄の「日満一体」』において、関東軍と開拓団との間の認識の相違を以下のように述べている。「関東軍にとって、有事の際に開拓民や義勇隊員が実戦に投入されることは当初から織り込み済みであったのである」、「これまでに、召集を免れられるといった風評を信じて開拓団民に応募したケースもあった<sup>⑧</sup>」。つまり、関東軍の開拓民を軍事的な目的に利用するのに対し、開拓民の認識の中では、開拓団と軍事的な役割とは無関係だと思われていた。しかし、実際には軍事的な役割を担わされていた面があったのである。

ただし、作中の開拓団において、農業移民の目的に対する認識の相違も読み取れる。国家総動員体制の中で、日本政府は開拓団を招致する際、開拓団員を「開拓の戦士だ、歟の戦士だ」と持ち上げていた。その「戦士」という呼び名の受け止め方について、開拓団内部でも意見が分かれる。ソ連参戦の知らせを受けた後、団の指揮をとっていた今团长は状況を確かめに二人の青年を派遣した。その後、二人の青年が帰らず、今团长は「斥候は帰りません。戦死です」と宣告した。状況を確かめに行かせた青年を斥候とし、その死を戦死と呼ぶ今团长は明らかに戦争をしているつもりであり、開拓団員は戦場に赴く戦士だと捉えている。

その一方、「自分は日本人であるが、別に軍人でもなければ、警察官

でもない。皆と同じように農民なのだ」(一三四頁)と木村忠三が独白するように、開拓団員はあくまでも農民である。開拓団長と団員との間に、「戦士」に対する認識のズレがうかがえる。今団長は、開拓団員が背負っている任務は農業するだけでなく、一朝有事の時に、戦う戦士になるのも求められると理解している。それに対し、開拓団員の木村忠三は、自分が「軍人でもなければ、警察官でもない」と理解し、「青雲の志が、健康な五体にみなぎっていた。日の出るのを待ちかねて、伐採に出るのだ。新しい家を作るために、新しい妻を迎えるために」(一四二頁)「満州」へ移民してきたつもりである。

また、引揚げとともに、開拓団員の中で、開拓団と関東軍、日本との関係は最初に思った支え合う関係から変化していく。逃避行を始めてすぐ、開拓団は十八名の日本兵隊と出会った。開拓団の人たちは「日本の兵隊さんだ、やっぱり私達を援けに来てくれた」「やっぱり日本は私達を裏切らなかつた」と思い、兵隊のために、炊き出ししたり、牛を殺したりして、その労をねぎらった。ところが、結局兵隊達は開拓団から食糧をもらっただけで、先へ行ってしまい、開拓団の逃避行を援助しなかつた。開拓団が積極的に兵隊に食糧を提供するのに、兵隊は再び開拓団を見捨てた。「おら、水砂糖やるじゃあなかつたよう」「おら、牛殺すんじゃないかつた」と吐き捨てる団員の言葉から、その兵隊、関東軍、日本への失望、裏切られた気持ちを読み取れる。

さらに、苦難の逃避行が終わり、開拓団の人たちは長春の收容所に落ち着くようになったが、長春から日本へ引揚げる目処が立たないまま、越冬を迎えることになった。

開拓の戦士だ、鍬の戦士だと、おだて上げて……このぎまだ。五年も六年も流した汗は一体どうなったと思っているのだ。丸裸さ。その上、命までくれというのか。そんなに欲しけりゃあくれてやるよ、馬鹿馬鹿しい。(一九六頁)

日本政府は農業移民を「開拓の戦士だ、鍬の戦士だ」と持ち上げ、開拓団を満州へ送り込みながら、ソ連が侵攻する際、開拓団を置き去りにし、悲惨な引揚げを体験させた。開拓団員は日本に約束された、苦勞をかけて耕作してきた土地も何もかも失い、絶望させられてしまう。更に、日本政府が早く引揚げの交渉を図ってくれず、何もかも失ったまま「満州」で越冬させられることは自分たちを死に追いやることだと思ふようになった。

関東軍、日本とはお互い支え合う一体関係にあると開拓団の農業移民が認識しているのに対し、農業移民は、関東軍にとって、兵站地、対ソ防衛のトーチカでしかない。その欺瞞性は日ソ開戦し、関東軍が劣勢になるとともに、露呈してくる。開拓団員も引揚げにおいて、日本との一体関係の欺瞞性を悟り、日本を自分の命を奪う対立関係に置くようになる。

戦後、「満州」農業移民に対する研究の中では、農業移民は対ソ作戦の「人間トーチカ」という役割を担わされたことが指摘されている。<sup>19)</sup> 結果的にみれば、「満州」農業移民、特に北満国境近くに配置された大青森郷開拓団のような開拓団は確かに、「人間トーチカ」の役割を果たしてきたのである。関東軍が強力な軍事力を持っている間、農業移民は軍

への食糧提供の兵站地として機能し、関東軍が勢力を失いつつあるなか、農業移民が、日ソ戦線の第一陣地に置かれたトーチカとして機能することが、関東軍の本当の狙いであった。

### 三、引揚げにおける様々な人物像——ジェンダーの観点から

ら

これまでの引揚げ、および引揚げについての研究は、日本人集団を一つの全体として扱うことが多い。また、多くの体験記も女性、あるいは男性だけの視点で引揚げを記したものである。その中で、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』が女性と男性との両方の視点で展開することとは特徴的である。前半は、加代の視点から、夫が不在の開拓団女性はどうのような逃避行を体験したかを記録したものである。後半になると、木村忠三を中心に、村上という男性団員の言動に注目しながら、密林を脱出した後の逃避行、特に女性の受難を描いた。なお、前述したように、加代の夫のモデルは、『花なき墓標 五戸郷開拓団の終焉』の筆者である川崎文三郎である。また、木村忠三のモデルは中村忠三という人物だと思われる<sup>20)</sup>。

#### (一) 加代の視点から——女性の受難

逃避行の過程を見れば、木村忠三は逃避行の全過程を経験した人物である。作品の視点は木村忠三に集中する方がむしろ自然である。しかし、藤原ていは小説が破綻する危険性を冒しても、あえて、女性の加代を前半の主人公に設定した。それは、藤原てい自身も夫がいない状況下で、子供三人を連れて、悲惨な引き揚げを経験したことに負うところが

多いと思われる。『流れる星は生きている』のなかで描かれた、主人公が風雨の中で、幼い子供三人を連れて逃避行を続けるシーンは『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』の中でも見られた。また、根こそぎ動員で男性がいなくなった開拓団では、女性が引揚げの主体になっているところは藤原ていにとって、見逃せないことであろう。したがって、女性の受難も、作品の大きなテーマとなっている。

松田澄子「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」において、開拓団女性の役割について、以下のように述べている。「満洲国で求められた女性役割とは、開拓民で家長である男性を支える従来からの良妻賢母であり、働き者であることのほかに、満洲国を純粋な日本人で満たし繁栄させるための人口政策として、女性に民族資源の量的確保という特別な役割が課されていたといえる。しかも、「大和民族の純血」を保持するためには、他民族の血を入れてはならなかった<sup>21)</sup>」。

作品前半の主人公加代は、まさに当時の典型的な開拓団女性として表象されている。日本の敗戦直前に、開拓団の男性は根こそぎ動員で応召していく中、開拓団の多くの女性は、女手一つで、子育てをしながら、農業に従事していた。「女手一つで、立派に軍への供出も果たしてみせよう」と男性がなくなった後、開拓団の女性たちは、男性の関東軍への食糧供給という役目を肩代わりに果たそうとしている。また、忙しく仕事する助産婦の樋渡が「何もお国のためですよ、生めよふやせよですからね」というように、日本国の要求に応え、開拓団の女性は「民族資源の量的確保<sup>22)</sup>」という役割も同時に果たしているのである。家父長制の開拓団において、男性は主体的な地位にあり、女性はその補助役として要

求される。

しかし、逃避行が始まると、女性は逃避行において、最悪の状況に置かれ、何人かの子供を連れて、逃げることになる。「加代はどうやら一番おくれってしまった」「木村忠三を含めた十二三人が、一番後に歩きおくれってしまった。殆ど誰もが子供を連れてた母親だった」というのは、逃避行の女性の実情であった。小興安領の高台で、忍泣きをする女を、加代は子供を泥沼で失った母親だと思った。疲れ切った加代は、その女を見る気力もなく、「多分あの女は、あの泥沼を目掛けて走っていったにちがいない」「自分の子供が、そこに死んでいるのだろう」と、ただ呆然とその女に起きたことを想像している。その想像はただの妄想ではなく、加代が見てきた風景であり、また、加代の身にいつでも起こりうることでもある。そのような状況があったのは、「夫は応召しているにちがいない」からである。幼い子供を連れてた女性たちの逃避行は、身軽な人より、一層大変で、同時に、なんの助力もない。泥沼にはまった女の多くは夫がいないことで、子供を泥沼に吞まれ、自身も死んでしまった。一方、夫が身近にいる女性と、いない女性は運命の軌道が分かれてしまう。鈴木大工の妻きねは加代と対照的に描かれている。きねは夫がいるので、独自に生路を探すことができたのに対し、加代は夫がいないから、開拓団に運命を任せるしかない。女性にとって、逃避行において、夫がいるかないかで、生死が決められることになった。

その後、加代と開拓団の多くの女性は、高台の白樺小屋に置き去りにされ、そこで死ぬことになった。その残留を決断したのは、開拓団の幹部で、男性である。猪股祐介「ホモソーシャルな戦争の記憶を越えて

——「満洲移民女性」に対する戦時性暴力を事例として」によれば、

「満州」に入植した開拓団では、「一般開拓団も開拓団法により、団長の権限は絶対化された。満洲開拓団において団長を頂点とする家父長制が敷かれていたのである」<sup>(23)</sup>。女性たちは、運命を他者に決められる立場にいる。団長をはじめとした団幹部は絶対な権威を持って、団の事務を決定してきた。逃避行の前半では、開拓団の組織はそのまま保存されている。限界状態に置かれた開拓団では、女性はこのような、家父長制の犠牲にならざるを得なかった。団幹部の命令で、「最も弱っている者、病人や子供、それに女達で歩けなくなっている者を、この山の麓へ残して、力のある者が、一日も早く、部落をみつめて、食糧を持って迎えに来ることになった」(六九頁)。「一週間」という目安は、なんの根拠もなく、明らかに欺瞞であるが、女性たちはそれに反抗することができず、命令に従うしかない。先発隊につれてもらった女性もいるが、女性をつれていくか、残すかを決めるのは、団幹部であり、男性である。女性性は、自分の意志ではなく、男性によって、運命が決められる。

作品の後半は木村忠三という男性の視点を通して展開していくが、木村忠三が経験し、辛く感じた出来事の多くが、女性たちの身に起きた不幸な出来事である。ハルピンにたどり着くまでの逃避行では、開拓団は何回も「匪襲」に遭い、物資などを奪われたばかりでなく、その度に、女性が攫われたり、暴行されたり、または子供を攫われたりして、「匪襲」の被害者になる。開拓団には男性が全くいないわけではないが、「匪襲」に立ち向かう男性は一人もいなかった。男性の木村忠三は、開拓団の女性を守ろうと決心しながらも、「死ぬのはいやだ」という自己

保身のために、身を挺して、女性を暴行からも、不幸からも守ることができなかった。

綏後で若い女性がソ連兵に暴行されたとき、木村忠三も、他の開拓団の女性も、黙っていた。「いくさに敗けただもの、しかたねえだべ」（一六三頁）と開拓団の女性はその被害を敗戦に帰結しているが、被害の時、守ってくれなかった男性を見逃したのは、開拓団としての共同性に亀裂を入れるのを恐れているのが、ないとは言えないだろう。集団としての開拓団では、男性たちは反抗せずに、女性が暴行を我慢することで、団全体の壊滅を避けるようにしていたのではないかと思われる。女性を犠牲にして、開拓団を守るという点において、前述した猪俣祐介が「ホモソーシャルな戦争の記憶を超えて——「満州移民女性」に対する戦時性暴力を事例として」で指摘した「ソ連軍に治安維持と引き換えに、独身女性一四、五名を提供した<sup>24)</sup>」という黒川開拓団の事例に通じるところがあると思う。また、ソ連兵の暴行を受けて、自殺した女性は「勤労奉仕隊で来た女学生」だという身分も興味深いものである。兵力が足りなくなり、根こそぎ動員が行われている中、開拓団の労働力補充として内地から送られてきた「勤労奉仕隊で来た女学生」は開拓団において、どのように位置付けられていたかを解明するには、作品の描写があまりにも少ないが、そのような女性の存在は決して見逃せないのである。

また、逃避行の途中、開拓団の女性たちは、生きていくために、自ら「満人」に身を売ったり、「満人」の妻になったり、「満人」に子供をやったりしていた。開拓団は極限状態に置かれるなか、かつての開拓団

の主体の男性たちは、補助役の女性たちを守ることが考えられなかった。「女だから……いざとなったら食う事に困らねえ」という村上の言葉は、開拓団の女性を男性の責任から追放したのである。

逃避行において、女性たちは夫がいないことで、苦勞したり、命を落としたりしていた。この点について、『流れる星は生きている』は同様に強調している。男性がいない原因が違うが、夫がいないことで引揚げの女性たちは大変苦勞をしてきたことは、普遍的に存在していたことが言えよう。しかし、開拓団の女性と居留民の女性とは全く同じ立場に置かれていたとは言えない。家父長制の厳しい開拓団の中で、男性が主体で、女性が補助役であった。女性は、補助役として、男性たちに奉仕したり、団の人的資源を保証するために子供を産んだりして、開拓団の一員として機能してきた。ところが、逃避行が始まると、同じ構造によって女性達は男性たちに運命を決められ、切り捨てられた。引揚げ時の満州において、開拓団は一番弱い立場に置かれているが、その開拓団内部では女性は一番弱い立場に置かれている。それは敗戦したから、仕方がないという一句で解決できるような問題ではない。もっと開拓団におけるジェンダー規範と深く関わっているのではないかと思われる。

なお、長春へ辿り着いたあと、生き残った開拓団の女性たちは、強い生命力と行動力を示すようになった。自由に仕事ができるようになる。開拓団の女性たちは、農家で働き、自活ができて、さらに病弱な木村忠三を養うようになる。敗戦直後、社会秩序が混乱する中、開拓団従来のジェンダー規範も一時に変化が起きた。女性は従来の規範から解放され、自力で生きていくようになったことは、引揚げ時の一つの特徴と

みている。

## (2) 木村忠三と村上

密林を脱出した後、年長の開拓団幹部が多く亡くなり、作品の後半部は、主に木村忠三という若い男性団員の視点で展開し、同時に、村上という男性団員の行動を対照に取り入れながら、開拓団男性の引揚げにおける姿勢を描いている。作品の後半は、木村忠三の視点で、開拓団集団に降りかかる被害を描いたが、その被害の多くは、女性の被害である。木村忠三と村上は、被害を受けながら、傍観者として、女性の被害を眺めることになる。女性に起きた被害を傍観する態度によって、木村忠三と村上の形象が浮かび上がっていく。

木村忠三は、「正義とか勇氣とか、希望とか、あらゆる青年の特権を身体中につめ込んでいるような青年」である。彼は、応召していった山崎総団長の依頼で、五戸郷開拓団の団長代理役を務めている。逃避行の全過程において、木村忠三は強い責任感を背負い、同時に、その責任感で、激しい心理的葛藤に苦しめられている。

白樺小屋に残して来た人たちのことを、木村忠三はずっと案じていた。内心の責任感と正義感は、木村忠三に死の危険を冒しながら、迎えに向かわせた。しかし、白樺小屋にたどり着き、目にしたのは、団員の死である。「体のいい大量殺人ではないか。足手まといをだまして逃げた極悪の裏切者ではないか」と、木村忠三は開拓団の判断を批判し、同時に、「自分の良心だの責任だの、人道だの、そんな人間的な虚飾がせつなかつた」と自分の人間的感情に苦しみ、「女達のように動物的本能だけの虜に」なれないことを悔やみ、深い虚無感に陥る。木村忠三は、

強い責任感と、虚無感との二重の苦しみに悩まされている。

その後、諾敏河開拓団に合流することをきっかけに、木村忠三はその虚無感から脱出し、「女達を満人の暴行から守ってやらなくてはならない」という強い責任感が蘇った。しかし、現実はそのいかなかった。その後の逃避行では、女性達は度々「満人」、ソ連兵の暴行の対象になる。木村忠三は人数の多い「満人」と武器を持ったソ連兵の前ではどうにもできない。暴行を受けた女性に手を差し伸べないことを苦に思いながら、木村忠三は「自己保存」のために女性を見捨てざるを得ない。その後、開拓団内部の分裂が現れ、女性達は諾敏河開拓団に戻ったり、「満人」の妻になったりして生きる道を探るようになる。それを「結局は自分の力が足りなかった事に起因するのだ」と木村が自責し、「自殺も出来ず、こうして陽に体を晒して、指導者ぶった口を利いてるではないか。できる事なら、この自分を吐き捨てたい」とさらに自己嫌悪に陥る。木村忠三は、責任感を捨てきれず、同時に、「自己保存」のエゴに苛まれつつある。

密林を経由する逃避行という極限の状況に置かれた木村忠三をはじめとする開拓団の男性たちは、深い密林の中で、大自然に対抗することができず、女子供、老人を守るという果たすべき男性としての役割を放棄した。諾敏河開拓団に合流するさい、木村忠三は再び開拓団の女性を守らなければならないと思うようになったが、しかし、その後の逃避行において、「満人」にも、ソ連兵にも、手を挙げるができなかった。立場が転倒された「満州」では、日本の男性たちは、かつて植民地時代の「満人」のように男性性を去勢されたのである。長春についた後、発

疹チフスにかかった木村忠三は、女性に養ってもらわなければ、生きていけないことになる。つまり、その去勢された状態は、引揚げができるまで続いた。

綏後では、木村忠三は母親を失った少女を救おうとした。白樺小屋の多くの団員の死について、「すでに、この人達の頭の中からは、あの白樺の小屋は消え去っている」ことで、木村忠三は、身内を白樺小屋に残してきた団員に、「何か絶望を感じた」のである。冷酷になった団員達に対して、その少女は、亡くなった母親を山の中へ残してきたことで、ずっと苦しんでいる。少女のそのいわゆる良心に、木村忠三は同感を覚え、「無事に生きて内地へ連れて行ってやりたい」と思うようになった。しかし、少女が病気で亡くなってしまった。「自分の力でどうにもならない流れに、押し流されて行く人間の切なさ」を木村忠三は再び味わうようになった。

開拓団の逃避行において、木村忠三を代表とした開拓団の男性たちは、自然環境にしろ、「満人」、ソ連兵にしろ、対抗できず、その男性性を去勢されたのである。その過程において、木村忠三は自分の力で、置き去りにされた人を探しに戻ったり、母親を失った少女を助けたりして、その男性性を取り戻そうと試みたが、大自然の中でも、情勢が転倒された「満州」社会でも、その試みが実現できなかった。

木村忠三は、強い責任感と無力感とに悩まされ、団員を救い得なかったことで、自己嫌悪になる。その内心の葛藤で逃避行中に苦しんできた。そのような木村忠三と対照的に、村上という人物も同時に描かれている。

村上は「内地にいた時肉屋をしてい」て、もともと農民ではなかった。不幸な家庭で育ち、教育をあまり受けなかった。普段の開拓団生活では、土地に対する愛着より、本業の養豚などが得意である。川村湊によると、「政府・軍部が推進する「高度国防国家建設体制」のもと、軍需産業の肥大化する一方、生活物資一般を扱う中小商工業の経営が逼迫、失業者・転業者を多く生むことになった。それらの人々を農業移民として満洲へ送り出そうという動きが、一九四〇年以降、拓務省を中心に活発化してくる<sup>55)</sup>」のである。村上はそのような帰農した一人である。これも村上が開拓団に対する感覚が木村忠三と違う一つの原因に考えられる。

逃避行中、村上は団員のために馬を屠殺して、配給したりすることで、自分が優先的にいい肉を手に入れる。自分が良い肉を食べることを馬を屠殺する仕事の報酬として捉えている。その考え方は、肉屋をやっていた商人の考え方であり、開拓団の一員としての集団的な考え方ではない。村上が開拓団の幹部でもないし、開拓団のことを任されているわけでもない。したがって公平に配給するなどという開拓団に対する責任感に囚われない。そのあとの逃避行でも、村上はいつも機転を利かし、うまく生存していく資源を手に入れる。

また、精神面において、木村忠三が過去の悲惨なことで悲しみ、自責の念に囚われているに対し、村上はいつも元気で、前に向かって積極的  
に手立てを考えている。また、女性たちの悲惨な境遇について、木村忠三は自分が女性たちを救うことができないことで苦しんでいるに対し、村上は、「女だから……いざとなったら食う事には困らねえ」と、軽く

その悲惨事を片付ける。木村忠三を含め、開拓団員が、体力と精神力が衰えているなか、村上はいつも元気に動いている。村上が死んだ団員のこと、少しも悩んだり、悲しんだりする様子を見せない。「何と傷つかない人間なのだろう」「不死身なのかもしれない」と木村忠三は、村上を自分と引き合わせて、自分の弱さと村上の強さを浮かび上がらせた。

しかし、村上は全く人情がわからないわけではない。諾敏河開拓団を襲撃した「満人」の困難を察することもあり、また困っている木村に食糧を与えたり、発疹チフスにかかった少女に卵を与えたりした。「風に乘って来てしまったように、過去の痛手を一寸も身につけていない。未だ来ばかりに生きているのだろうか。」(一五九頁)と木村忠三が嘆くように、村上は、開拓団責任を一身に背負い、苦しんでいる木村忠三と違い、開拓団に対する責任にとらわれず、自分が生きていくことだけを考える。ハルピンについた後、村上は活路を求めするために団から離脱して撫順へ脱出した。

以上のように、作中において、木村忠三と村上は対照的に描かれている。開拓団が極限な状況に置かれた中、木村忠三は、団を任されたという強い責任感と外界に対する無力感にとらわれ、ずっと苦しんできた。それに対し、肉屋から帰農した村上は、開拓団に対する連帯感と責任感が薄く、自分が生きていくことだけを考えて行動する。

木村忠三と村上のような対照的な人物を設定することで、極限状況に置かれた人間の本質をあらわにした一方、男性性の去勢に伴う開拓団という家父長制的組織の崩壊、また、その組織に囚われた人間の心理的葛

藤、それから、組織から逸脱する人間の可能性を提示してくれた。

#### 四、他者としての「満人」

引揚げの日本人集団内部に視線を集中するのは、引揚げ体験記の一つの大きな特徴である。しかし、外部への視線を遮断することは、引揚げ体験の全貌を取り損なうおそれがある。『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』が他の大青森開拓団に関する記録と違うもう一つの特徴は、開拓団の外部にも目を向け、「満人」との葛藤を詳しく描いているところである。その描写によって、「満人」の表象はより立体的なものになっていく。傀儡政権「満州国」において、五族協和を鼓吹しながら、「二等は日本人、二等は朝鮮人、三等は漢・満人」というように「満州」在住の各民族をランク付けし、日本人は他の民族の上に君臨していた。『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』において、「満人」と呼ばれたのは、満州族だけではなく、漢民族などを含む中国人のことである。

密林を脱出した後に、たどり着いた六河村では、「満人」は飢え死にしかけた開拓団員に食糧を与え、日本語のわかる青年は風呂を沸かしてくれた。その青年は「ハルピンノ、ニホンノガッコウニイマシタ」と語る人である。その青年は日本の敗戦を伝え、木村忠三に「スミマセンデシタ」「ミンナオワリデス」と話しかけた。日本の学校にいて、日本人に親切的な青年は、運命を日本の植民地支配とともにしてきた。しかし、青年の将来は開拓団と同じく日本の敗戦によって終わりにさせられた。一部の日本支配に将来を託した中国人の、日本の敗戦で希望が破れた経験は、青年の身に凝縮されているといえよう。ところが、「満人」青年



は日本人の木村忠三に「スミマセンデシタ」と言った。日本の植民地支配から脱出した「満人」は、日本人に謝るといふのは、この青年がいまだに、過去の日本人との支配と被支配の関係にとどまっているのだろう。植民地支配が終わり、被支配民族が、支配民族に向かって謝るのは、アイロニーにしか見えない。

一方、青年の「スミマセンデシタ」を聞いた木村忠三は、「そうだ、みんな終わりなのだ。この青年の希望も、終わりになったのかも知れない。一体何と云って、わびたらいいのだろうか」と戸惑った。木村忠三は詫びる気持ちになっているが、それは、開拓団の終わりとともに終わった青年の希望に対する申し訳ない気持ちであり、植民地支配に対する反省ではない。また、「今迄の生活も、今迄の行動も、すべて、「祖国日本」という、バックに支えられ、その基盤の上に立った生き方だった」と開拓団が「満洲」での存在を木村忠三が回顧した。しかし、その回顧は、自分の立場に立ったものであり、同時に青年への申し訳ない気持ちはなくまでも、青年が日本と一体になったという前提の上でのものである。

その後、開拓団が四海店に着いた時、「満人」の女が高梁飯を開拓団に送った。また、綏稜へ向かう途中、さらわれた子供を送り返し、食糧と防寒服をも開拓団に送った綏稜警察隊の「満人」がいた。これらの「満人」はなぜ日本人を助けたかについて、言及されていない。木村忠三は「いたわりをこめたその行為」に「声を上げて泣いた」。日本人が困りきっている時、手を差し伸べた「満人」がいた。しかし、「満人もいい人がいるなあ」という開拓団の女性の嘆きは、「満人」の一般はい

い人ではないことをほのめかしている。

そのように考えた原因は「満人」による被害が多かったからである。開拓団が密林から脱出した後、遭遇したすべての不幸は「満人」によるものであった。諾敏河開拓団で「満人」が集団的に襲撃してきたことがあった。また、逃避行の途中、開拓団の女性に暴行し、食糧と衣類を奪った「匪賊」がいた。さらに、子供をさらった「満人」もいて、ソ連兵を連れて、収容所へ略奪にくる「満人」もいた。「満人」が襲撃してくる原因について、木村忠三は以下のように追憶している。

ある日のこと団本部へ、附近に住む満人が談判に来た。自分達が何千年もかかって開墾した土地を捨て値で売放して、そのかわりにとして新しい奥地の開墾地をあたえられているのだが、奥地は高梁もできない荒地だから、せめて、この辺の空地を開墾させてほしいというような事をいったことを覚えている。

(中略)

あの時は、日本政府の強大な圧力に屈して、帰って行ったのだけれども、いま日本が崩壊した今日、彼等が立上る事はむしろ当然なのかも知れない。(一一五頁)

木村忠三のなかでは、「満人」がなぜ襲ってくるのかは自明である。日本の開拓団の入植で、地元の「満人」は、長年耕作してきた土地を安値で手放し、奥地に追い込まれていたのである。しかも、開拓団近くの空地を開墾することも許されなかった。開拓団の入植によって、「満人」

は首を扼されたように、生きていく土地を奪われた、日本による「満州」移民の被害者にほかならない。その日本人に対する怨恨のタネは日本人の手で、早く撒かれてあったことは木村忠三の追憶から読み取れる。木村忠三は、「満人」のその暴行について、一定の理解を示していると思える。

しかし、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』では、「満人」の多くは個々の顔を持った人物ではなく、「黄色い歯」、「綿入れの満服」、「纏足」、「ニンニクの臭い」といった視覚的、臭覚的なイメージとして表象されている。作品の全篇において、中国人は「満人」と呼ばれ、また、開拓団に襲いかかってくる「満人」は「匪賊」「暴民」と呼ばれている。さらに、「悪鬼と善鬼」という章があり、「満人」による援助と加害を交えて書いているが、援助した「満人」にしろ、加害した「満人」にしろ、一律に「鬼」と見なされている。開拓団員にとって、「満人」による被害の度合いは、はるかに援助を超えているだろう。そのほか、もう一つの理由に、開拓団の日本人にとって、中国人は言語的な交通ができない異質な存在であることが考えられる。

作品の中では、開拓団員は「満語」が話せないことで、当地の「満人」と交流できないことは何度も強調されている。開拓団の人たちは、「満人」に助けられた時、「シエー、シエー、シエー」しか言えなく、また、襲いかかってくる「暴民」に、「自分は日本人であるが、別に軍人でもなければ、警察官でもない、皆と同じように農民なのだ」（一三四頁）という弁解もできない。言語は壁のように、日本人と「満人」の間に横たわっている。それは、「北満へ入植しても、殆ど日本人ばかりの

部落で、日常、満語を使う必要に迫れなかった人達ばかりであった」（九八頁）からである。同じ土地にいても、日本人と「満人」が空間的に断絶している。その空間的な断絶によって、また言語的な断絶が生まれる。

言語の不通は、「口々に何かののしっている」「満人」の言い分は日本人にはわからなく、また、日本人の「満人」に訴えることは、「満人」にもわからないという真空状態を作り出した。「満人」の「勝利の眼、反抗の眼、憐憫の眼、強暴なほどに貪欲に光る眼」といったあらゆる情緒は、日本人には目付きでしか受け取れなかった。また、第三節で触れたように、開拓団の女性の役割の一つに、「民族資源の量的確保と共に大和民族の純血を保持すること」<sup>27)</sup>があった。つまり、「大和民族」と「満人」との民族間の通婚は許されず、民族的な断絶も要求されている。日本が敗戦後、混乱状態に陥った「満州」では、「満人」は日本による被害を清算した。またその清算が度を超えて、「満人」は被害者から加害者へ変貌していく。一方、混乱の中で、開拓団の日本人に助けの手を差し伸べた「満人」もいる。加害者である「満人」と援助者である「満人」との両方が作品の中に書き込まれている。しかし、そのような「満人」のどちらも、開拓団の日本人にとって、交通、交流のできない異質な他者でしかない。

なお、第一部分的「恐怖の伝令」という節の中で、逃避行中の開拓団がオロチオン族に会ったことが書かれている。「満人でもなさそうである。無論日本人ではない」オロチオン族の人は、日本人から見れば、「満人」離れて、日本人にも属さない。オロチオン族は「すでに五道林

## 終わりに

にはソ連の騎馬が駐屯してしまっている事、その上オロチオン族とソ連兵と交戦して、二十四名のオロチオン族が死んでしまった事」を大青森開拓団に告げた。現地人のオロチオン族が「満人」と違い、開拓団を襲撃せず、ソ連兵と交戦したというのは、関東軍によるオロチオン族工作の結果にはかならない。「狩猟民族のオロチオンは興安嶺の地形や気象を熟知して勇猛、射撃力は世界一と言われ、オロチオン馬は山の湿地帯や密林の網状の木の根を踏み分け、樹林のすき間を身をくねらせて駆ける抜ける特殊能力がある。ソ連軍が満州中央部に入るには大小興安嶺を通過するから、オロチオン族とその馬は守備と攻撃に役立つ。それにオロチオンは故地シベリアに同胞がいるから諜報活動にも役立つ」とされて

いるので、早く一九三四年から、関東軍の特務機関はオロチオン族について実態調査を始め、また同年、日系満軍軍官をオロチオン族の居住地に派遣し、工作に取り掛かっていた。その後、黒河特務機関、海拉爾特務機関などが設置され、生活必要品の入手経路をたち、物資配給という方法で、また、アヘンを使い、葉漬けにして、オロチオン族を支配し、オロチオン部隊を編成し、抗日軍の討伐、対ソ戦に使った。大青森開拓団が入植していた黒河省は、オロチオン工作の拠点の一つであった。作中においては、オロチオン族に対する描写は非常に少ないが、日本人とオロチオン族との関係性を提示してくれた。また、現実においては、日本の植民地支配下の「満州国」では、オロチオン族が、抗日軍の討伐、対ソ戦の道具として、関東軍に位置付けられ、日本が敗戦した後、切り捨てられたことは、見逃してならない。

引揚げ文学を研究する際、多くの犠牲者を出した開拓団の引揚げを見逃すことはできない。しかし、開拓団の引揚げを描いた作品も少ないし、これまでの引揚げ文学研究は開拓団の引揚げを扱った作品を論述したのも少ない。したがって『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は引揚げ文学を検討するには、欠かすことのできないテキストと思われる。大青森郷開拓団に対する記述を論述してきた通り、開拓団の被害というテーマは一貫してきた。その中で、『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は、これまでの俯瞰的な視角ではなく、女性団員と男性団員両方の視角から展開していく。女性の引揚げ体験の重要視、および男性の視角を取り入れたことは、特徴的なものである。

日本の敗戦による混乱の中で、開拓団は切り捨てられ、ソ連兵の行進を阻止するトーチカのような存在であった。開拓団の中で、苦境の中に置かれた女性は開拓団内部においても、外部においても、一番弱い立場に置かれている。開拓団の男性達は、団が被害を受ける中、木村忠三のような、団に対する責任感と自分の無力とに苦しんだ人もいるし、また、村上のような開拓団という集団にとらわれず、独自に生きる道を探る人もいる。その一方、団外部において、「満人」対日本人の関係は複雑な様相を呈して、被害と加害の転換が見られた。満人の被害者から加害者への転換は、戦後、日本人の「満州」植民地支配に対する反省の回路を遮断することになった。

『赤い丘 赤い河——十字架を背負って』は開拓団の引揚げにおける

複雑な加害、被害関係を提示して、引揚げにおける様々な人物像を書き上げていく。のみならず、開拓団が多くの死者を出したのは、ソ連軍、「満人」による暴行だけではなく、開拓団内部の決断によって、多くの女性団員、子供、老人を死なせたことを描いたのも、引揚げ文学を考察するさいには、新しい重要な視角を提示したと言える。

注

- (1) 現在の中国東北地方。
- (2) 塚瀬進『満洲の日本人』（吉川弘文館、二〇〇四年九月）一頁
- (3) 蘭信三『満洲移民』の歴史社会学（行路社、一九九四年二月）四五頁
- (4) 浅田喬二『満洲農業移民と農業・土地問題』『岩波講座 近代日本と植民地3 植民地化と産業化』（岩波書店、一九九三年二月）
- (5) 成田龍一『戦争経験』の戦後史 語られた体験／証言／記憶（岩波書店、二〇一二年二月）九七頁
- (6) 藤巻啓森『日本帝国主義下の植民地経営——青森県の満洲移民』経緯について（『青森明の星短期大学研究紀要』第二八号、二〇〇六年）八七頁
- (7) 川浪元『大青森郷開拓団遭難記』（雄鶏通信）一九四九年五月号）
- (8) 東久邇稔彦『大東亜戦史』（富士書苑、九五年五月）序文
- (9) 合田一道『満蒙開拓団の終焉 検証・満洲一九四五年夏』（扶桑社、二〇〇八年八月）
- (10) 劉建輝『満洲』幻想の成立とその射程（『アジア遊学』（特集）日中から見る「旧満洲」）二〇〇二年一〇月）を参照。
- (11) 成田龍一、前掲書、『戦争経験』の戦後史 語られた体験／証言／記憶』を参照。
- (12) 藤巻啓森、前掲論文、「日本帝国主義下の植民地経営——青森県の満洲移民」経緯について、八五頁
- (13) 第1期は一九三二年～一九三六年、第2期は一九三七年～一九四一年、第3期は一九四二年～一九四五年である。

- (14) 蘭信三、前掲書、『満洲移民』の歴史社会学』四八頁
- (15) 蘭信三、前掲書、『満洲移民』の歴史社会学』四九頁
- (16) 山室信一『キメラ 満洲国の肖像』（中公新書、一九九三年七月）二九八頁
- (17) 喜多一雄『満洲開拓論』（明文堂、一九九四年）六一頁
- (18) 加藤聖文『満蒙開拓団 虚妄の「日満」体』（岩波書店、二〇一七年）
- (19) 浅田喬二、前掲論文、「満洲農業移民と農業・土地問題」七九頁
- (20) 川崎文三郎『大青森郷開拓団避難状況報告』塚原常次「北滿農民救済記録」（二〇一四年九月）
- (21) 松田澄子『満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害』（『生活文化研究所報告』第四五号、二〇一八年三月）
- (22) 拓務省拓北局輔導課『女子拓殖指導者提要』（拓務省拓北局、一九四二年）一二四頁
- (23) 猪股祐介『ホモソーシャルな戦争の記憶を越えて——「満洲移民女性」に対する戦時性暴力を事例として』（『軍事史学』第五一卷第二号、二〇一五年九月）
- (24) 猪股祐介、前掲論文、「ホモソーシャルな戦争の記憶を越えて——「満洲移民女性」に対する戦時性暴力を事例として」
- (25) 川村湊『満洲開拓叢書 第3巻』解説（ゆまに書房、二〇一六年二月）
- (26) 山室信一、前掲書、『キメラ 満洲国の肖像』二七九頁
- (27) 拓務省拓北局輔導課『女子拓殖指導者提要』（拓務省拓北局、一九四二年）一二四頁
- (28) 林郁『満洲国』のオロチョン工作とその最期（『植民地文化研究』第三号、二〇〇四年七月）
- (29) 杉目昇『関東軍のオロチョン工作と興安嶺を超えて退避した日本人の記録』（私家版、別府・杉目昇、二〇〇三年八月）国立国会図書館蔵
- (30) 中生勝美『オロチョン族を阿片漬けにした日本軍——「満洲国」少数民族宣撫工作の裏面』（『世界』六七四号、二〇〇〇年五月）